

『私が最も尊敬する外交官』

2015年01月22日

佐藤優氏は元外交官として活動し「インテリジェンス（諜報）」の専門家であった。彼が著した『私が最も尊敬する外交官 ナチス・ドイツの崩壊を目撃した吉野文六』を興味深く読んだ。外交官になった吉野氏の誕生から敗戦までの生涯を描いた大部の著作である。残された公文書や関係者たちが書き残した資料などを読み解いた記述には説得力があり、歴史の動きを臨場感あふれる筆で伝えている。佐藤氏の経験と知識から、出来事の周辺を幅広く紹介し、吉野氏との対話では、生き生きとした時代の出来事を語り合っている。

吉野氏は東京帝国大学法学部に進み、ドイツ観念論系統やマルクス主義関係ではなく、英米の自由主義的、実証主義的な書物に惹かれていった。それが、現実的な外交を支えたという。大学卒業後、外交官になり、ドイツに渡り、ベルリンの日本大使館に勤める。日独伊三国同盟が締結され、ヒトラーが力をつけていた時代である。吉野氏はヒトラーに批判的、また、仕方なく同調した人々が多くいたと語っている。

宮田光雄先生はナチスの統治技法を「いっさいを貫徹し永続するテロは、批判的知性をも無力感と孤立感に陥れ、全体的集団の匿名性への逃避性向を強めずにはいない」と指摘している。この指摘は重要であると「現下日本でも、個人情報保護という大義名分によって匿名化が急速に進んでいるが、その背景に少数者を排除する同調圧力があることを、多くの日本人は認識していない」と書いている。いかにも佐藤氏らしい。

ナチスは連合軍に圧迫され、ソ連との戦いに敗れ、苦境に立つ。ベルリンは包囲され、集中砲火を浴びる。大島浩大使は安全な所に逃げ、吉野氏など数名が日本大使館に籠城する。連日の猛爆を受け、幾度も命の危険に晒されたが、運よく助かったと言っている。その中、大島大使に酒と肴を届けるように命令され、飛行機からの攻撃を避け、命からがらドライブをした話には呆れる。上司の命令は外交官でも絶対だった訳である。ヒトラーは自殺し、ドイツは降伏する。ソ連兵がベルリンに入り、強奪、レイプが横行し、ベルリンは荒れ果てる。佐藤氏はこの敗戦と、ソ連崩壊の惨状と重ね合わせ、国家滅亡の惨劇を伝えている。吉野氏はポーランド、ソ連を経由して帰国し、許嫁と結婚する。そこで、敗戦を迎える。国家間では激しい情報戦があり、国民は知らずに、ただ翻弄させられるだけである。人間は罪深い存在であり、国家間の戦争が絡むと罪は増幅する。

吉野氏は戦後、外務省アメリカ局長として、1971年の沖縄返還交渉に関わった。この交渉で、本来ならば米国が支払うべき軍用地の復元費400万ドルを日本が肩代わりして支払う密約が交わされた。密約疑惑を、毎日新聞の西山太吉氏がスクープしたが、裁判でうやむやに葬り去られた。2006年に開示した米国公文書から、密約があったことが公になった。その公文書に吉野氏のイニシャルが書かれていた。吉野氏は「お前のイニシャルではないかと言われたら、肯定せざるを得ない」と潔く認めた。密約がなければ、沖縄返還は実現できない状況であったと言われている。外務省は密約の存在を認めていない。

佐藤氏はイスラエルのエフライム・ハレビーにインテリジェンスの基本哲学を「神を畏れよ」「真理を畏れよ」「歴史に対して嘘をついてはいけない」と教えられた。青年外交官だった吉野氏はナチス第三帝国の崩壊から「国民に嘘をつく国家は滅びる」という歴史の法則を学んだと見える。それが、吉野氏を尊敬する理由である。

特定秘密保護法は国家の隠蔽体質を助長し、意味のない犯罪を生み出し、国民を取り返しのつかない悲劇に巻き込むのではないか。そんな警告の著作として読んだ。